

つなげよう! ひろげよう!

多言語・多文化 いせさきの学び



伊勢崎市教育委員会



ハジメテ先生

学級担任。来月から外国につながりをもつ子どもが学級に編入してくる。



ケイケン先生

学級担任。学級に外国につながりをもつ子どもが在籍している。



ニホンゴ先生

日本語教室担当教員。4月から外国につながりをもつ子どもの日本語学習や教科学習の指導を担当している。

ある年の夏休み中の会話



今度、私の学級に外国からの編入生が来るんですよ。
どんな子かなあ。
ケイケン先生の学級には外国につながりをもつ子ども
がいますよね。どんなふうになっているんですか？
何かサポートのコツってありますか？

その子は日本語で会話できるので、私は特別なサポートは
していないんだけど、でも、授業がわからないのかなって
思うときがあるんですよ。何か、もっと私にできることが
あるんじゃないかなあって…。



そうですか…。日本語でコミュニケーションできるよう
になれば大丈夫かなって思ってたけど…。うちに来る子ども
は日本語も初めて勉強するし、日本語で教科も勉強しなく
ちゃいけないから大変だなあ。どうやってサポートしたら
いいんでしょうね。ニホンゴ先生、どうしましょう？

実は私も悩んでいて…。一人ひとりに合ったサポートって
何だろう、日本語教室でできることって何だろうって…。



私たちもわかっていないことが多いんですね。新しく
来る子どもが、この学校で楽しく過ごせるといいんだ
けど、私たちにできることって何でしょうねえ？

「3人寄れば…」ですよ、一緒に考えていきましょう。
あ、そういえば、こんな冊子、もらったんですけど…。



子どもが学ぶための環境づくり

はじめに

わあ！「はじめに」からスタートして、4つの島がありますね！
どこから行きましょうか？

大切な母語・母文化

ことばの力を伸ばすために

子どもの学びのデザイン

目 次

本書の構成

はじめに

伊勢崎市は多言語・多文化が強み！
複数のことばを学ぶ意義

- I 子どもが学ぶための環境づくり** 1
 - 初めて来た子どもが安心できる環境づくり
 - 在籍学級の学習活動に参加するための環境づくり
 - 指導や支援の体制づくり –日本語教室や、子どもの周囲のリソースの活用–

- II 子どもの学びのデザイン** 13
 - 子どもの「Goodポイント」を活用する –まず1つの授業で考える–
 - 大まかな目標とそのための支援方法をデザインする –少し長めの期間で考える–
 - 一人ひとりの状況に対応した指導をカスタマイズする

- III 大切な母語・母文化** 23
 - 母語・母文化の大切さをみんなに伝える
 - 母語の力が認知力・思考力の土台になる
 - 保護者や地域の関係者とともに母語・母文化を育む

- IV ことばの力を伸ばすために** 31
 - 子どものことばの力について
 - 教科学習に必要なことばの力
 - 複言語・複文化をもつ子どもの世界

本書の構成

本書は、伊勢崎市の先生が、多様な言語文化背景をもつ児童生徒が学ぶ伊勢崎市の強みを活かした学校・学級づくりや、指導のヒントを得られることを目指して作成されました。

本書は、I～IVの4つの章で構成されています。どの章から読み始めてもかまいません。それぞれの章は、以下の3つのパートに分かれています。たとえば各章の「一歩ふみ出す先生へ」だけを読み進めていくこともできます。

一歩ふみ出す先生へ

このパートは、多様な言語文化背景をもつ児童生徒の在籍学級での学習指導について考えたい、一歩ふみ出したいという先生方を対象としています。在籍学級でまず始めること、日本語や母語について知っておきたいこと等、基本的なことが書かれています。

もっと深めたい先生へ

このパートは、多様な言語文化背景をもつ児童生徒や日本語学習中の子どもへの指導の経験をもち、その方法をレベルアップさせたいと考えている先生方を対象としています。「一歩ふみ出す先生へ」の内容をふまえ、自ら授業や活動を創造し、実践するためのヒントになることが書かれています。

さらに極めたい先生へ

このパートは、より幅広い視点から活動の工夫を考えている先生や、様々な関係者とつながりながら支援を考えていきたい先生を対象としています。「一歩ふみ出す先生へ」「もっと深めたい先生へ」の内容をさらに発展させ、多様な子どもを包摂した学びについて考えていくための手がかりとなることが書かれています。

※本冊子では、特にことわりがなく「子ども」と書かれている場合は、外国につながりをもつ子どもを指しています。

参考資料

伊勢崎市教育研究所「つながる・ひろがる ISESAKI ステップ」

<https://www.city.isesaki.lg.jp/material/files/group/77/2020isesakistep.pdf>

群馬県教育委員会「ぐんまの外国につながる子供たちの学び応援サイト ハーモニー」

<https://www.pref.gunma.jp/site/harmony/>

文部科学省「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm



はじめに

伊勢崎市は多言語・多文化が強み！

伊勢崎市は群馬県の中でも外国人住民が多い地域です。市内の小中学校には様々な国や地域につながりをもつ子どもたちが多く在籍しており、豊かな言語・文化に触れる機会に恵まれています。

様々な言語文化背景をもつ人々、様々な考え方や価値観をもつ人々とともに構成される学校がもつ「強み」とは何でしょうか？

普段よく外国につながりをもつ子どもたちに接している市内の学校の先生方からはこのような考えが挙げられました。

いろいろな国や地域の子どもたちと日常的に接していると…

- 子ども自身の世界が広がる
- 子どもがオープン・マインドになる
- 「いろいろな国や地域を知りたい」「行ってみたい」というきっかけになる
- 新しい言語や文化に興味広がる
- コミュニケーションの仕方が広がる
- 「違っていいのは当たり前」と、お互いに違いを受け入れられるようになる



なるほど、
なるほど



そうそう、子どもたちの興味も広がりますよね！



社会には多くの言語や文化があること、多様な考え方や価値観で成り立っていることが自然に受け入れられるこの環境は、伊勢崎市の大きな「強み」と言えます。誰もがこの環境を享受でき、よりよい未来を創り出していけるように、そして一人ひとりもっていることばや文化を「貴重な資本」とできるように、伊勢崎市の「強み」を活かした学校教育をみんなで一緒に考えていきましょう。

複数のことばを学ぶ意義

伊勢崎市の子どもたちは、小学校から外国語として英語を学びます。外国につながりをもつ子どもたちは、自分たちの母語の他に第二言語である日本語も身につけ、日本語で学習に参加します。このように子どもたちは誰もが複数のことばを学んでいます。では、複数のことばを学ぶことによって、どのような力が育成されていくのでしょうか。

例えば、皆さんが外国語で誰かとコミュニケーションをする時のことを思い出してみてください。「一番得意ではないことば」を使うときは、このようなことをしていませんか？

- 相手のことばを注意深く聞いて、相手の思いを何とか理解しようとする
- 自分も持っている知識を総動員して、相手に自分の思いを何とか伝えようとする

このような「相手の言っていることをよく理解しよう」「自分の思いをわかりやすく伝えよう」という活動を繰り返し行うことで、そのことばを使えるようになるだけでなく、「相手の立場」「自分とは異なる立場」からの見方や考え方も意識され、身につけていきます。

つまり、「新しいことばを学ぶ」という学習活動を通して、以下のことが期待されます。

- ものごとを捉える視野が広がる
- 思考の仕方が多角化される
- より豊かな考え方ができるようになる

「複数のことばを学ぶ」ということは、新しい語彙や文法の知識量を増やし、運用力を高めるだけでなく、相手とのつながりのなかで自分の認識を広げることでもあります。母語以外のことばを学ぶこと、自分の中に複数のことばの力を育てていくことは、大きな意義があるのです。

外国につながりをもつ子どもが「日本語を学ぶこと」も同様の意義があります。単に「日本で生活できるように」「日本語で勉強ができるように」することのみを目的にするのではなく、「母語も日本語も身につけることで、その子ども自身の世界を広げられるように」と考えていきましょう。



I 子どもが学ぶための環境づくり



初めて日本に来る子どもは、突然日本語ばかりの環境になって、不安ですよ。



うちのクラスの外国につながりをもつ子どもは、学級では静かなんです。日本語教室ではたくさん話して、よく勉強しているみたいですけど…。



在籍学級で自分らしくいられるように、日本語教室でもサポートしたいんですよ。

在籍学級でみんなと一緒に楽しく学ぶために、私たちは何ができるでしょうか？



一歩ふみ出す先生へ

初めて来た子どもが安心できる環境づくり

初めて学校に来たとき、先生たちから学校のルール、持ち物、勉強する内容の説明などを聞いて、それだけで子どもは頭がいっぱいになってしまうかもしれません。まずは子どもが「この学校、この学級ならやっていけそう！」と感じられるようにしていきましょう。

1. 子どもの緊張や不安を和らげる

子どもが自分の母語以外を使って、慣れない環境で学習活動に取り組むときは、緊張や不安などの心理的な負担がかかります。このような負担が大きいと、学習内容の理解や言語の習得がスムーズにいかないこともあります。反対に、子どもが安心して、リラックスして取り組める環境が整っているときは学びやすくなります。



自分が不安だと思っていたけど、きっと子どもや保護者はもっと不安に感じていますよね。

2. 「在籍学級の一員であること」を意識する

子どもの日本語の習得状況に応じて、日本語教室で指導が受けられる場合があります。日本語教室では、子どもの状況に合わせた指導ができるというメリットもありますが、その間、子どもは在籍学級の学習内容や活動とは離れてしまい、学級の子どもたちと共有できることが少なくなってしまいます。在籍学級では「子どもが学級の一員であること」「この学級が子どもの居場所であること」を意識して、みんなと一緒に活動できる機会を作りましょう。

3. 子どもたち同士の関係性構築を大切にする

子どもは、周囲の他の子どもたちと接しながら、また学級でしていることを見たり聞いたりしながら多くのことを学んでいます。一人ではなかなか難しいことも、友達のちょっとした手助けがあればできることもあります。誰か困っている子どもや手助けが必要な子どもがいたら支えよう、助けようという学級の雰囲気づくりが大切になります。

また、中学校では部活動への参加もよいきっかけになります。得意なスポーツや、好きな活動など、何か「共通のこと」をきっかけとして仲間と一緒に取り組むと、友人関係が広がり、その過程で日本語習得も進むことが期待されます。



【学校全体での取り組みのアイデア】

アイデア1：初めて来た子どもに、先生が学校への歓迎の気持ちを表現する

子どもを学校に迎え入れるとき（初来日の場合だけではなく、他から転入してきた場合も）、校長先生をはじめ、先生たち自身で大歓迎の気持ちを表現してみましょう。

例えば、先生が自動翻訳機を使って子どもの母語を調べ、「こんにちは」「はじめまして」「私たちは、〇〇さんがこの学校に来てくれてとても嬉しいです」と言ってみましょう。たどたどしくても自分で発音することで、先生たちの歓迎の気持ちは伝わります。

アイデア2：子どもとつながりのある国・地域の情報を掲示する

学校にいる子どもたちに関連する国や地域の情報が一目でわかるような掲示を、誰もが見やすい場所に示し、先生にも子どもたちにも共有されるようにします。外国につながりをもつ子どもの情報だけではなく、支援助手の先生、ALTの先生に関連する国や地域なども含めると、さらに掲示の幅が広がり、世界の様々な国や地域とのつながりが、学校の子どもたちに一目でわかります。



【学級での取り組みのアイデア】

アイデア3：歓迎の仕方を学級のみみんなで考える

子どもを初めて在籍学級に迎え入れるとき、学級全体で歓迎ができるようにしましょう。学級の子どもたち自身から歓迎のアイデアを出してもらうのも効果的です。

例えば、以下のような歓迎の例はどうでしょうか。

- 子どもの母語での挨拶に全員でチャレンジする
- ことばを使わずにできる簡単なゲームなどで楽しむ
- これまでの学校行事や学級活動の写真・動画を見せる
- この学級を教える先生たちを写真で紹介する

学級の子どもたちに協力してもらおう！
みんなもその子のことが知りたいですね。



アイデア4：子どもの得意なことや好きなことを聞く

最初に在籍学級に迎え入れた時、自動翻訳機を使って「〇〇さんの好きなもの・好きなこと、得意なことを教えてください」と聞いてみましょう。学級の中に同じものが好きな子どもがいたら、それがコミュニケーションの第一歩になるかもしれません。

事例① 子どもの得意な「歌」を活用

ヘミさんは小学校3年生のときに韓国から日本の学校に来ました。担任の先生は「ヘミさんは歌がとても上手です。ヘミさんに韓国の歌を教えてもらいましょう。」と紹介し、ヘミさんが美しい声で韓国の童謡（兎と切り株のお話の歌）を歌ってくれました。学級の子どもたちは、単語の意味はわからなくても、歌詞とメロディーを耳で覚えてみんなでヘミさんと一緒に歌いました。それをきっかけに、みんな一生懸命に身振り手振りを交えてヘミさんに質問したり話したりしました。

事例② 子どもの得意な「バスケット」を活用

ケン君は小学校6年生の後半で来日しました。小学校卒業までに十分な日本語学習の時間が取れず、小学校の先生たちは心配していました。でも、ケン君は中学校では得意なバスケット部に入部し、活躍するようになりました。部活の仲間と一緒に練習をするなかで、ケン君はどんどん日本語を吸収し、使うことができるようになっていきました。

アイデア5：子どもの知っていることばで発話する機会を設ける

みんなが聞いてくれる環境があれば、子どもは自分が知っている語彙や学んだ表現を使ってコミュニケーションすることができます。その子どもが話せるトピックや、使えることばを日本語教室担当教員と相談して、子どもが学級で発言したり、学級の子ども同士でやり取りしたりする機会をつくっていきましょう。

事例③ クラスのみんなで「通訳」！

ホセさんは小学校3年生です。約半年前に来日し、今は1日2～3時間日本語教室で日本語を勉強して、その後は在籍学級で過ごします。在籍学級にはたくさんの友達がいます。

ホセさんの学級では、帰りの会で「今日、楽しかったこと」を発表する時間があります。発表したいときは手を挙げるのですが、ホセさんも積極的に「はい、はい」と手を挙げます。指名されるとホセさんは「きょう、5時、ずこう、**で、〇〇して、…」と少し不明瞭ですが、自分が知っている日本語を何とか駆使して一生懸命話します。ホセさんが話し終わると、他の子どもたちが手を挙げて、「今、ホセさんは『ずこう』って言ったから『図工で絵を書いて楽しかった』って言いたかったと思う」「多分、ホセさんが言いたかったのは、いろいろな色を使ったことじゃない?」「ホセさんは、図工の後のゴミ掃除を頑張っていたね」など、それぞれホセさんの発言の内容を補おうとしていました。ホセさんはニコニコ頷きながら聞いています。みんなが「ホセさんの言いたいことは何だろう?」と考えてくれることが、ホセさんはとても嬉しいようです。

子どもが「話したい、伝えたい」と思うことが、まずは大事なんですね。それをクラスで共有できるといいですね。



もっと深めたい先生へ

在籍学級の学習活動に参加するための環境づくり

日本語の理解がまだ限られていると、「学級での教科学習参加は難しい」「ことばがわからないのに授業を受けさせるのは、子どもがかわいそうだ」と考えられる傾向があります。

しかし、子どもの日本語の力と、認知的発達段階は同じではありません。日本語を学び始めたばかりでも、適切な支援を受けられる環境があれば教科の学習に参加し、その内容の本質的な部分や面白さに触れることは可能です。自動翻訳機を活用することはもちろん、非言語情報を含む様々な手段を使うことで、子どもは少しずつ学習にアプローチできます。

在籍学級の授業に参加するからこそ学べる内容があるという意識をもち、「どうすればその子どもが学習内容にアプローチできるか」という視点で授業の活動を考えましょう。

1. 子どもが表現する方法を広げる

子どもが自分の考えを表現するときに、母語・日本語・絵・ジェスチャーや指差しなど、何を使ってもよいとすると、子どもがもっている考えをより豊かに引き出すことができます。自動翻訳機の使用や、支援助手のサポートも積極的に取り入れていきましょう。その子どもが自分の考えを表出してから、日本語で対話を行い、最終的に日本語でまとめられるように支援します。

事例④ タブレットの自動翻訳を活用

小学校6年生の担任、タナカ先生のクラスには、外国につながりをもつ児童が複数在籍しています。日本語教室に通級していない子どもがほとんどですが、やはり教科書のことばや表現がすべて理解できるわけではありません。タナカ先生は子どもに授業でわからないことばがあったときは自分でタブレットの自動翻訳を使うようにとっています。子どもは教科書のことばの翻訳だけでなく、自分で表現したいことを日本語でどのように言うのかも調べることがあります。タブレットを活用することで子どもたちは母語の力も使いながら、授業の活動に参加できるようになりました。

子どもが「あ、わかった!」「わあ、面白い!」と感じたことを、いろいろな方法で伝えられるようにしておくといいですね。



事例⑤ 母語を使って理解を確認

小学校3年国語科「三年とうげ」の単元を在籍学級で学習中のマルコさん（ブラジル出身、編入して5か月）に、「どんなお話でしたか？」と物語の内容を日本語で話してもらいました。

「おじいさんが、山が、やってるが、おじいさんが、ごはんが、suco（ジュース）が、paranoite（夜になったから）帰ろう、帰ろうって言ってる、はやく、ころんだ、だめ、30メートルが、3かい、いた、いた、いたーい、おじいさん、まって、おばあさん、ともだち来て、…（教科書の挿し絵を指して話す）」（※ところどころポルトガル語が含まれる）

その後で、母語のポルトガル語でも物語の内容を話してもらいました。

「山に登って、何メートルかわからない、ごはんを食べて、ジュースを飲んで、景色を見てた。暗くなったからおうちに戻りたかったけど、あわてて行って、走って転んじゃって、おばあさんを読んで、友達を読んで、3回転んで……」（※録音して日本語に翻訳）

母語で確認すると、在籍学級での授業を通して、物語のあらすじがある程度理解できていることが確認できました。

2. 活動に子ども同士の助け合い・学び合いの機会を取り入れる

日本語を学びながら教科を学んでいる子どもは、先生や友達のことばを聞き、観察し、意味を推測しながら考えています。内容によっては、大人数で一斉に行われる活動よりも、グループやペアなど、少人数での活動のほうが、リラックスして自分の考えや言いたいことをより表現しやすくなったり、お互いに教えやすくなったりします。このような協働学習の形態の工夫を授業に積極的に取り入れることで、子どもたちの学び合いが促進されます。

在籍学級で入り込み指導を行う教員がいる場合も、その子どもへの直接的な支援をしすぎてしまうと、かえって子ども同士の学び合いや助け合いの機会が少なくなってしまうこともあります。子どもが自分で周りの人のことばを聞き取り推測する力、子どもたち同士のかかわり合いのなかで発揮される力の「芽」を大切に育てていきましょう。

3. 授業の内容と子どもとのつながりを創る

日本語で書かれた教科書は、日本語学習中の子どもたちにとって読むのに時間がかかります。また、内容を母語に翻訳してもそのままでは理解しにくい日本の文化背景等が含まれていることが多くあります。「知らないことだらけ」では、子どもが学習内容と自分との間に何の関連性も見いだせない可能性があります。

その子自身が知っていること・身につけていること、好きなことや興味関心のあること、言語文化背景等を学習や活動の内容と関連づける工夫をしてみましょう。

例えば、まず次のようなちょっとした関連づけから始めてみてはどうでしょうか。



ちょっとした関連づけの例

- 算数の文章題に出てくる語彙を、子どもがわかりやすいものに変える
(例:「折り鶴6羽…」ではなく「サッカーボール6こ」に変えるなど)
- 子どもと関連のある国や地域の事柄を積極的に学習内容に取り入れる
- 子どもが好きなこと・もの(スポーツ、アニメのキャラクターなど)を例にする
- 体育の時間に、子どもがよく知っている音楽を取り入れる(体操やダンスなど)



授業で使っているプリント、
見直してみよう!

何が結びつけられるか、
いろいろ試してみると
いいですね。



事例⑥ 英語の授業で活躍

中学校で英語を教えているカトウ先生は、授業中、外国につながりをもつ生徒のなかで英語が得意な生徒が活躍できる場を積極的に作っています。日本語母語話者の生徒のなかに「英語に興味がある」「英語での会話にチャレンジしたい」と思っている生徒はたくさんいるので、この会話交流はとて素晴らしい機会になっています。外国につながりをもつ生徒も、英語が母語ではない場合がほとんどですが「自分の得意なことが発揮できる場」を楽しんでいます。

4. 教室で教員が「いつもしている配慮」を意識的に使う

先生方はすでに日頃の授業で様々な配慮を行っているでしょう。その配慮を、子どもの視点から、より意識的に行うようにするだけでも、日本語母語話者の児童生徒を含め、教科学習につまずきがちなすべての子どもにとってわかりやすい授業になります。



先生方がいつもしている配慮の例

- キーワードを初めに提示する
- 教材や板書に視覚的な工夫を施す(色分け、しるし、図など)
- 難しい漢字にルビを振る
- 動作を交えて話す
- 大事な部分ははっきりと発音し、繰り返す
- 指で該当部分を指し示しながら話す
- わかりやすい表現に言い換える
- 最後にもう一度、主要概念や重要な用語のまとめと意味の確認を行う

これ、教室でよくすることばかり。これをもっと意識的に使ってみようかな。



事例⑦ 板書の工夫 -簡潔な内容と色分け-

小学校3年生担任のヨシダ先生の学級には外国につながりをもつ児童が5人います。それぞれ出身、母語、日本語習得状況も異なりますが、一緒に在籍学級で勉強しています。ヨシダ先生が観察していると、その5人は板書をノートに書くのに時間がかかり、やってほしい活動になかなか移れないことがわかりました。そこで板書する内容をできるだけ簡潔にし、「必ずノートに書くこと」と「時間があればノートに書くこと」を色分けして示すようにしました。

ヨシダ先生は「子どもがノートに書いていても『勉強している』とは言えないですね。単に写しているだけかもしれません。日本語学習中の子どもはノートを書くだけでもとても負担がかかりますから、その負担を少し軽減して、一緒に勉強できる活動時間を増やしたいと思っています。」と言っています。

「ちょっとした…」 「いつもしている…」
なるほど、何か特別なサポートが必要なのかなと
思っていたけど、これまで自分がやってきたこと
の延長線上、と考えればいいですね。



さらに極めたい先生へ

指導や支援の体制づくり —日本語教室や、子どもの周囲のリソースの活用—

多様な言語文化背景をもつ子どもの教育は、様々な関係者の連携のなかで行うことが求められます。日本語を学習中の子どもの指導も、日本語教室の先生にお任せするのではなく、また担任の先生が一人で抱え込むのでもなく、関連する先生方がみんなで考えていく必要があります。在籍学級と日本語教室がどのようにタッグを組んでいくか、また地域社会や子どもの周囲にあるリソースをどのように活用していくか、一緒にアイデアを出し合ひましょう。

1. 日本語教室での指導時間をどのように決めるか

子どもにとっての学習の基盤は在籍学級での学習活動です。その学習に参加するための支援を受けられる機会として、日本語教室での指導があります。

日本語教室での指導をどのくらいの時間数実施するかは、「いつ、どのタイミングで、何を個別に指導すると子どもの在籍学級での活動に有効か」を基準に検討する必要があります。その子どもの日本語のレベルだけが基準にはなりません。例えば、普段は在籍学級で学んでいても、ある単元の学習の時は復習を手厚くするために個別指導の時間を増やし、次の単元ではまた在籍学級で学ぶ、ということも可能です。

「日本語支援なしで在籍学級で学習できるのはいつなのか」と考えがちですが、実際は日本語習得が進んでも支援が必要となるタイミングは何度もあります。子どもにその時点で何が必要かを把握して「いつ日本語教室での指導を活用するか」を考えていきましょう。

「特別の教育課程」では、年間10時間～280時間が標準とされていますので、日本語教室に定期的に通級する必要がなくなったとしても、以下のように、一時的に日本語教室で指導をすることも可能です。



一時的な日本語教室での指導や支援の例

■ 先行学習

ある単元で支援の必要性が予想できるときに限り、一時的に日本語教室で、単元が始まる前にキーワードや概念などを学習します。ある程度学習内容の見通しがつくだけでも、在籍学級で少し余裕をもって取り組むことができます。

■ 定期試験前の確認

普段は在籍学級での学習に参加している子どもでも、中学校等の定期試験の前にまとめや復習の時間を日本語教室で取り、教室では聞けなかった質問を受け付けることもできます。

■ 学校行事・課外活動の参加前の確認

学校外での活動、宿泊を伴う活動などに参加する際は、在籍学級でも事前準備が行われます。初めてそのような活動に参加する場合、子どもたちが知っていることは教員側の想像以上に少ないことが予想されます。何の目的でどのようなことをするのか、持ち物は何か、配慮すべきことがあるかなど、事前に時間を取って個別に説明しましょう。

■ 進路指導時の説明

特に高校進学のための情報については、自国での進学方法との違いもあるため、こちらが「当たり前」と思っている内容でも、丁寧に説明する必要があります。学校や学級で全体に説明を行うだけでなく、本人の疑問や希望などをじっくり聞く時間を個別に取りましょう。



日本語教室では日本語の勉強だけじゃないんですね。
いろいろ柔軟に考えてみます！

そうですね。ぜひ一緒に相談しましょう。



2. 在籍学級と日本語教室がどのようにタッグを組むか

子どもの支援は在籍学級と日本語教室が両輪となって進めます。そのためには先生同士が子どもの成長をともに支えていく「共同責任者」になることが必要になります。

日本語教室で行われている指導の内容や方法が、在籍学級での学習とかけ離れていては、子どもは異なる内容を時間ごとに断片的に学ぶことになってしまい、かえって負担が大きくなる可能性があります。日本語教室で学習することで「在籍学級の学習への不参加を補ってあまりある内容」が学べるようにしましょう。

そのためには、単に学習内容の連絡と報告をするだけでなく、学級担任と日本語教室担当教員とで協働し、「在籍学級で何をするか」「日本語教室で何を、何のためにサポートするか」など、「支援の内容を一緒に考え、試行錯誤し、最善策を検討する」ことが求められます。互いが協働できる体制づくりも重要な一歩となります。



強力なタッグを組みましょう！

事例⑧ 教室の配置・机の配置の工夫

ある小学校では、日本語教室がほとんど他の児童が通ることのない隅っこに設置されていました。それを、多くの児童が行き交う場所の教室に変更したところ、児童や教員が日本語教室での学習の様子や学習成果の掲示物などを日常的に目にするようになりました。そして、外国につながりをもつ子どもたちの日頃の頑張りがわかるようになり、教員間で話題になることが増えました。

また、ある中学校では、日本語教室担当教員の机を職員室の中心に配置しました。すると、日本語教室の先生と他の先生方が、ちょっとした空き時間で情報共有しやすくなりました。

日本語教室での子どもの様子を聞くことから始めようかな。
2つの教室で何ができるか、ニホンゴ先生とアイデアを出し合ってみよう！



3. 子どもがもっているリソースを活用した「学びの広がり」を考える

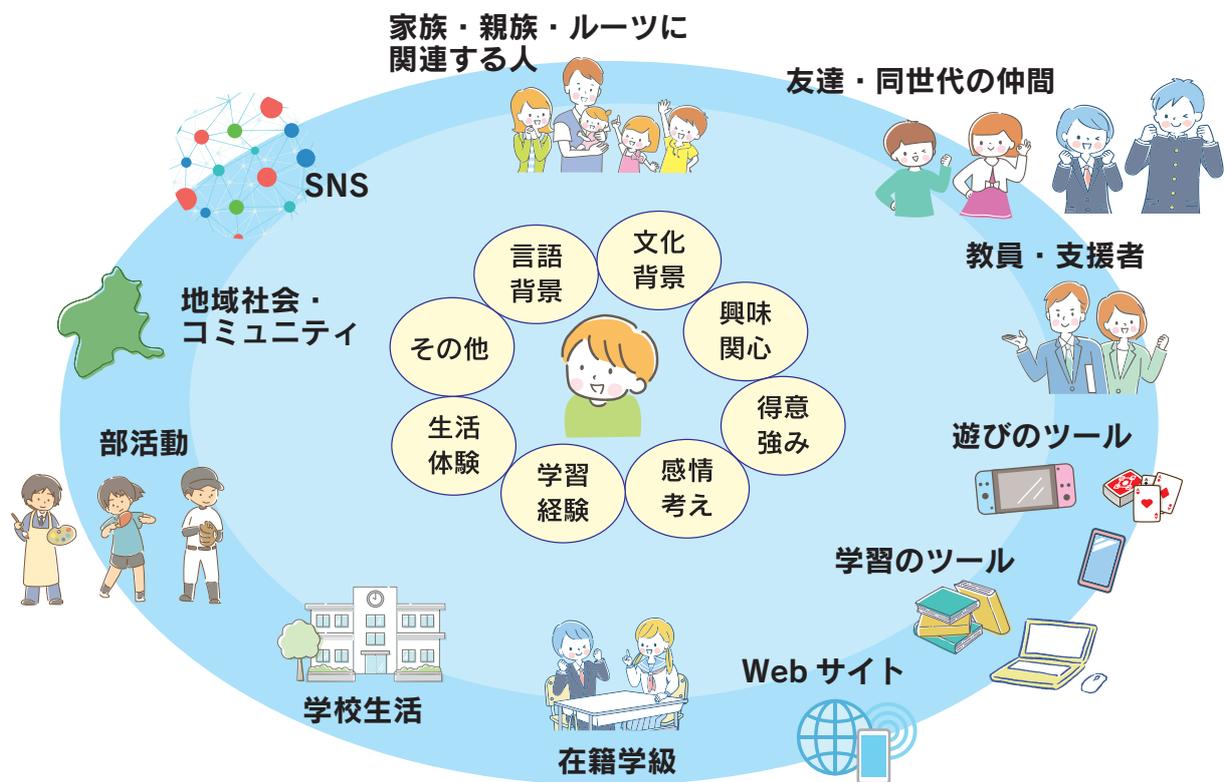
子どもは「与えられた知識や情報を受け身的に頭に蓄えていく」のではなく、「子ども自身が主体的に知識を構成していく」ことによって学んでいきます。例えば子どもが「自分の知っていること」と「新たに入ってきた情報」とのつながりを見つけ、それを納得して「自分ごと化」できたときや、自分一人では何かをできるようになったとき、学びが広がっていきます。

学習内容の導入を考えるときに、子どもがもっているリソース（子どもの言語文化背景、経験、興味関心、強みなど）の活用を意識すると、新しい知識と子どもとのつながりがスムーズに進みます。



例えば、外国につながりをもつ子どものリソースには以下のようなものがあります。

- ・言語背景：子どもの母語（得意なことば）、自分のルーツのことば、日本語
- ・文化背景：家庭の文化、子どものルーツの文化、日本の文化
- ・興味関心：子どもが好きなもの、興味があるもの
- ・得意・強み：子どもが得意とすること、子どもの「よさ」
- ・感情・考え：子どもの気持ち、思い、考え方、価値観、信じていること
- ・学習経験：出身国・地域で学んだこと、日本の学校で経験したこと、在籍学級で学んだこと
- ・生活体験：家庭や地域で経験したこと



わー！学びのネットワークが
作れそう。

子どもの身の回りのリソースって
たくさんあるんですね。
私の学級の子どもは、どのリソース
とつなげられそうかなあ。



その他、子どもの周囲の環境には様々な人・モノ・場が存在します。これらはすべて学びを広げるためのリソースとなります。日本語学習でも、在籍学級での学習でもこれらを活用することができます。

まずは子どもをじっくり観察することで、彼らもっている貴重なリソースを確認し、どのように学習活動につなげていけるかを考えていきましょう。



II 子どもの学びのデザイン



使える日本語は限られているから、授業はどうしたらいいのかな？
何かからどうやって始めるのか…。



学級にいれば自然にできるようになる、ということはないですよね。何か計画的に学習活動を考えたいと思うのですが。「この目標のために、こんな指導をする」というような…。



たしかに、子どもの学習をどのように進めていくか、その方針がないと困りますよね。在籍学級と日本語教室に共通する「地図」のようなものがないと、どこに、どうやって進むのかわからないですよね。

子どもの学びを計画的に進めるには、
どうしたらいいでしょうか？



一歩ふみ出す先生へ

子どもの「Goodポイント」を活用する -まず1つの授業で考える-

先生はみんな「日本語学習中の子どもも、在籍学級で学ぶ楽しさ、面白さを感じてもらいたい。子どもが学習できるようになってほしい」と思っているでしょう。でも、「どこからどのように始めたらいいのかわからない」と感じる先生は多いと思います。

理解したり使用したりできる日本語は限られていても、子ども自身が身につけていることや知っていること、強みや得意なことなどはたくさんあります。それらを子どもの「Goodポイント」として、学級での学習や活動に活用することができれば、「(日本語ではまだ表現できないけれど) わかった! できた!」「(教科の内容の) この部分が面白い!」と感じる経験が重なっていき、在籍学級の活動への参加度がぐっと高まります。まずは「Goodポイント」を活用して、ある1つの授業でデザインしてみましょう。

【Goodポイントの活用の仕方】

(1) まず、その子どもの「ある一日」の在籍学級の様子をよく観察しましょう。

「このくらいできるのは普通のことだからGoodポイントとは言えない」と考えるのではなく、その子どものいいところ、得意なこと、知っていることや好きなことなど、どんな小さなことでもGoodポイントとしてたくさん挙げてみてください。



例えば、このような点を観察してみてもいいでしょうか。

- 友達と話したり、遊んだりしているか (誰と、どのようなことをしているかなど)
- 給食や掃除の時間はどのように過ごしているか
- 係の仕事はどのようにしているか
- 授業では学習にどのように取り組んでいるか
(わからないときはどうしているか、グループワーク・ペア活動はできているかなど)
- 楽しそうにしている活動、得意な活動は何か
- どのような話題に興味関心があるか

Goodポイント探し、頑張ってみよう!
「できて当たり前」とスルーしないで、たくさん挙げたいなあ。



(2) 次に、(1) で挙げたGoodポイントを在籍学級の学習や活動などに使って、授業をデザインしてみましょう。



例えば、このような「ちょっとしたこと」を使ってはどうでしょうか。

- 絵を描くことが好きな子ども：物語文の続きをイラストで描いて表現する
- 体を動かすことが得意な子ども：運動会のダンスのモデルを頼む
- 1対1なら友達に話しかけられる子ども：授業でペアワークの活動を取り入れる

最初からこれらがすべてうまくいくとは限りません。でも、まずは「Goodポイント」を認めて、活動に取り入れることを意識していきましょう。

(3) (2) で考えたことを実践で試したら、子どもの反応を確認しましょう。

- 子どもの様子はどうだったか、想定通りの反応が得られたか
- 学級の子どもたちはどのように反応したか
- 次の活動に活かせそうなことはあったか

この(3)は「実践の振り返り」にあたります。この振り返りから新たな実践のヒントが見つかります。

「子どもを観察する」→「Goodポイントを見つける」→「授業でGoodポイントが活かせる活動をデザインする」→「実践する」→「実践について振り返る」というサイクルを繰り返し、子どもの状況に応じた指導の工夫を少しずつ探っていきましょう。



どのGoodポイントがどのように活用できるか、いろいろ試すのも面白そう！

日本語教室でもGoodポイントを探します。ぜひ共有しましょう！



もっと深めたい先生へ

大まかな目標とそのための支援方法をデザインする ー少し長めの期間で考えるー

子どもの様子を観察していくと、先生方は「今ここまでできるから、次は〇〇ができるようになってほしい」と思うことがあるでしょう。そのようなときは、在籍学級の学習活動の中から「〇〇の力を伸ばすには、こうしたらいいのでは？」と思う活動を選び、日本語教室での指導と組み合わせながら、「いつまでに〇〇ができるように」と見通しを立ててデザインしていきましょう。

例えば以下の(1)～(5)の順で考えてみてはどうでしょうか。【→p.18「ある児童を対象とした活動デザインの例」参照】

(1) 子どもの現状を把握する

教科担任、日本語教室担当教員、支援助手など複数の関係者から情報をもらい、メモとして書き出して、その子どもの現状を詳しく、多角的に見取りましょう。

その際、子どもができないことや、足りないことだけを見るのではなく、「できること」「良いところ」「興味・関心をもっていること」などに注目していくことがとても大切です。

- ・授業中の様子（日本語教室と在籍学級での学習の様子の違い）
- ・休み時間の友達との関係性
- ・その子どもが一人でできること、適切な支援があればできそうなこと

(2) 大まかな目標を立てる

その子どもがいつごろまでに、何ができるようになるかを考えて大まかな目標を設定します。目標は「少し支援があれば達成できそうなこと」を考えましょう。また「2学期末までに」「〇月ごろまでに」「この単元の学習が終わるまでに」のように、ある程度の期間を設定します。

目標例

学期末までに、学級みんなに自分の考えが言えるようになる

(3) 目標を具体化する

大まかな目標ができたら、それを在籍学級の「どの授業・時間で」「何が」できればいいのか、より具体的に考えていきます。家庭科、音楽、体育などの実技教科や、教科以外の活動も含めて、幅広く目標達成に活用できそうな活動を考えましょう。(2)の目標例を具体化すると、例えば「帰りの会で、今日の嬉しかった出来事を一人で言えるようになる」などが考えられそうです。

目標の具体化の例

- ・帰りの会で、「今日の嬉しかった出来事」を一人で言えるようになる
- ・国語の物語文を読んで、感想を言えるようになる

(4) 協力してもらえる人を探す

この目標達成のための支援の内容を一緒に考え、検討してくれる人を探します。日本語教室担当教員や支援助手に協力を依頼する場合、可能な日時を調整しておく必要があります。その他、在籍学級でどのクラスメイトがその子どもと一緒にグループ活動がしやすいかも考えておきましょう。

(5) 目標の達成に必要な支援方法を考える

具体化した目標が達成できるようになるためのスモールステップを考えます。大切なのは、「誰が何をするか」を具体的に考えることです。また、在籍学級での支援方法だけではなく、日本語教室で行うことも合わせて考えてみましょう。

ここまで考えられたら、早速実践してみましょう。支援の方法が想定通り進まなかった場合、また目標が適切ではなかったと判断された場合は、いつでも軌道修正をしていきましょう。



目標も方法も、大まかに捉えることから始めればいいですね。
そのほうが軌道修正しやすいですね。

学級の先生が考えた目標や方法、日本語教室
でもぜひ共有したいです。



ある児童を対象とした活動デザインの例

| | | |
|--|---|--|
| <p>現状</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中の様子 ・友達との関係 ・支援があればできそうなこと | <ul style="list-style-type: none"> ・日本語教室ではよく発話できるが、在籍学級では発話が少ない。答えに自信があるときは積極的に挙手できるが、声が小さい時がある。 ・日本語を正しく話したいという思いがあるようだ。間違えてしまうことに抵抗があるのかもしれない。「間違えたら嫌だから日本語で話さない」ということもある（支援助手への聞き取りより）。 ・学級の子どもたちとの仲は良い。しかしまだ自分から話しかけたり、積極的におしゃべりを続けたりする姿は見られない。休み時間は同じ母語の児童と話していることが多い。 ・教員がじっくり子どもの話を聞くと、学級 みんなに共有したいようないい意見を言うことができる（時々母語も混じるが、言いたいことは伝わる）。 ・自分でタブレットを使って翻訳することができる。 | |
| <p>大まかな目標</p> | <p>学期末までに、学級 みんなに自分の考えが言えるようになる</p> | |
| <p>具体的な目標</p> | <p>帰りの会で「今日の嬉しかった出来事」を一人で言えるようになる</p> | <p>国語の物語文を読んで、感想を言えるようになる</p> |
| <p>協力者</p> | <p>日本語教室担当教員、支援助手 学級の子どもたち</p> | <p>学級の子どもたち、支援助手 日本語教室担当教員、保護者</p> |
| <p>支援方法</p> <p>支援する人 学級担任(担) 日本語教室担当教員(日) 支援助手(支) 学級の子どもたち(子) 保護者(保)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・学級の帰りの会で、他の子どもたちが「今日の嬉しかった出来事」を言った後、その子どもが理解できるように、やさしい日本語で言い換える(子)(担) ・日本語教室でも「嬉しかったこと」を発表する機会を設けてもらう(日)(支) ・子どもが帰りの会で「嬉しかったこと」を言う前に、あらかじめメモを作っておく(担) ・単元が始まる前に母語訳で物語を読み、大まかなあらすじをとらえてもらう(担)(支)(保) ・先行学習で、一度物語文をざっと読み、新しい言葉を学んでおく(日) ・授業やグループ活動では、タブレットの自動翻訳を使えるようにする(担) ・全員の前ではなく、グループで考えを共有する時間を何回か作る(担)(子) ・その子どもがグループで発話したことをみんなで共有する(担)(子) ・物語の感想を学級で発表する前に日本語教室で準備と練習をしてもらう(日)(支) | |



なるほど…。こんな感じでデザインしていただければいいですね。小さい「働きかけ」をいくつか準備しておく感じかな。

さらに極めたい先生へ

一人ひとりの状況に対応した指導をカスタマイズする

在籍学級の学習では、1年間の指導計画があり、それに沿って学年全体で進んでいます。「一人ひとりの状況に対応した指導」とは、その指導計画と全く別の内容をするものではありません。全体の指導計画の大きな流れの中に位置づけながら、個々の具体的な内容に少しアレンジを加えていくことです。1つの授業でも、または1つの単元でも、対象の子どもに応じた指導を計画的に行うことで、その後の子どもの変容が期待できます。

1. 個に応じた指導を計画するときの視点

「一人ひとりの状況に応じた指導」を考えるのは時間がかかりますが、何の事前準備も計画もなく学習を進めると、その場限りの対応になってしまい、かえって非効率になります。「きちんとした計画」ではなくても構わないので、「このように指導したらこうなるのでは」ということから書き出してみましょう。

「一人ひとりの状況に応じた指導」を考えるために、以下のような視点が必要です。

- 在籍学級の学習のどの活動に参加することが目指されているか
- 在籍学級と日本語教室のそれぞれで、誰が何をするか
- そのやり方は、子どもの現状に適したものになっているか

書いてみることで、「何のために、何をするのか」が整理されます。また、教員、支援助手だけではなく、学習の主体である子ども自身や保護者にも「この目標のために、これをする」ということが共有しやすくなります。

書き出してみることで、自分の考えも整理できそう。
それに、子どもの状況や、これからの計画をいろいろな人に伝えやすくなりますね。



注意点

● 様々な視点から方法を考える

指導の計画は、「どうすれば、在籍学級での学習や活動にその子どもが参加しやすくなるか」を基本軸とします。この「どうすれば」には、「その子どもへの支援」だけでなく、「在籍学級の活動のあり方の工夫」も含まれます。

● 計画は適宜、修正・変更する

その子どもにとって何が適切な指導か、また期間内に目標達成が可能かどうかなど、実際に学習を始めてから気づくことが多々あります。「計画とは異なる指導方法のほうが有効だ」「到達目標は**にしたほうがいい」と気づいたときは、柔軟に、そして速やかに計画を変更します。

● 「個別の指導計画」とも関連させる

子どもが日本語教室に通級している場合、そこでの指導とつなげることが重要です。一人ひとりの指導については「個別の指導計画」が作成されています。在籍学級の活動への参加を考える際も、この「個別の指導計画」と関連させて、日本語教室担当教員の協力を得ていくことが必要になります。

「個別の指導計画」については、『つながる・ひろがる ISESAKI ステップ』の7～11頁、『個別の指導計画』の作成～『日本語ステップ』を活用して～も参照しましょう。



ニホンゴ先生、一緒をお願いします！



ぜひぜひ！

2. 「サポートがあればできること」へのチャレンジを促す

子どもには「すでに一人でできること」と、「まだ一人ではできないこと」の間に「一人ではできないけれど、誰かのサポートがあればできそうなこと」があります。「すでに一人でできること」だけをしていては新たな学びは生まれません。また「まだ一人ではできないこと」に挑戦するときは、何の手がかり・足がかりもなければ困難です。「一人ではできないけれど、誰かのサポートがあればできそうなこと」を見極めて、その部分に働きかけ、挑戦を促すことによって、子どもは学び、成長していきます。サポートをする人は、子どもが達成できるように後押しし、徐々に一人でできることを増やしていくように計画します。

3. 「個人の足りない力を補う」だけでなく、「みんなが成長する」ためのデザインを描く

日本語学習中の子どもを指導しているとき、「まだ**ができない」「〇〇を覚えていない」と不足している点に目が行き、その「足りない力」を補おうとばかり考えてはいませんか。「日本語を効果的に習得する」「学齢相当の学習内容に追いつく」ことももちろん大切ですが、そればかり考えると、その子どもの教育課題が「できないこと」だけになり、「課題が山積！」という状態に陥ってしまいます。

日本語学習中の子どもは、「日本語ができない子ども」ではありません。母語や母文化の他に日本語も日本文化も身につけつつあり、さらに日本語で在籍学級の学習に参加している「同時に複数のことにチャレンジし続けている子ども」です。指導の際は、その子どものチャレンジを応援しながら、子どもが学ぶ楽しさを感じ、できることが増えていくように後押ししましょう。

確かにそうだなあ。
子どもが頑張っているのをしっかり認めていくことが大事なんだ。



また、指導や支援をする側は日本語学習中の子どもへの働きかけのみを考えてしまいますが、周囲の子どもたちへの働きかけや、学習・生活の環境を整えていくことも重要です。在籍学級の活動を「日本語学習中の子どもも参加する」ことを前提に組み立て、学習で使うツールを工夫するという視点が必要になります。

「何か不足している誰かのための特別な支援」ではなく、「みんなが力を発揮しながら成長していく学校」にするには、受け入れ側（教員・学級の子ども）の協働・寛容・異文化理解の促進が重要となります。



「みんなが成長していく学校」、いいですねー。
子どもも、先生も、みんなが成長していけそうですね！



Ⅲ 大切な母語・母文化



つい、子どもの日本語の力ばかり見てしまうけど、子どもの母語も大切ですね。母語を忘れちゃったら、困りますよね。



そうですね、でも、子どもの母語は、私はちょっとできないし…。支援助手の先生にお願いするぐらいしか…。



いえいえ、私たちにもできることはありますよ、きっと。何ができるか、考えてみましょう！

子どもの母語・母文化を大切にするために、
どんなことができるのでしょうか？



一歩ふみ出す先生へ

母語・母文化の大切さをみんなに伝える

子どもが家庭や出身地で育んできた母語・母文化はアイデンティティの基盤となる大切なものですが、その価値や重要性が日本社会の中で相対的に見えにくくなっている場合があります。子どもたち一人ひとりが自分の母語・母文化を大切にしながら成長できるよう、先生が「みんなの母語・母文化を大事に思っている」というメッセージを意識的に伝えていきましょう。

1. 母語・母文化の大切さを子ども本人に伝える

まずは、子ども本人に対して、その子どもがこれまで培ってきた母語・母文化、そしてそこで得た経験を「先生も大切に思っている」ということを伝えましょう。

例えば、以下のようなちょっとした声かけも有効です。



ちょっとした声かけの例

- 「おはよう！」 「いいですね！」 など簡単な声かけを、その子どもの母語で言う
- 「〇〇って何？ 教えて」と、子どもの母語・母文化や出身地について教えてもらう
- 「〇〇の学校ではどうだった？」 と、出身地の学校でのことを聞く

事例⑨ 校長先生の「おはよう！」

ミカさんは親の仕事の都合で6歳の時に渡米し、まったく英語がわからない状態で現地校に編入しました。その小学校で外国人はミカさんだけでした。初めの一週間は、周りの違う顔、わからない言葉に大きな不安を感じたのが毎日泣いて家に帰っていました。ところが、次の月曜日、にこにこの笑顔で帰ってきました。お母さんが「何かいいことがあったの？」と聞くと、ミカさんは「校長先生が日本語で『ミカ、おはよう！』って言った」と言いました。そのたった一言で、ミカさんの心が開いたのです。

その後、ミカさんは友達もたくさんでき、英語にも慣れていきました。

事例⑩ 子どもの母語で先生が自己紹介！

右の写真は小学校の日本語教室担当のコバヤシ先生が、子どもとの初めての出会いのときに子どもに渡した「先生の自己紹介カード」です。3人の児童に対して、それぞれの母語の文字を使って書かれています（中国語、ベトナム語、スペイン語）。

コバヤシ先生はこのカードを一人ひとりに渡しながら、その子どもの母語で簡単なあいさつをしました。子どもたちは、先生が自分たちの言葉を話してくれたことに驚いていました。そして、とても嬉しそうでした。



2. 母語・母文化の大切さを学校や学級の子どもたちに伝える

学校や学級には日本語が得意な子もいれば、**語が得意な子もいます。日本の文化で育っている子もいれば、〇〇の文化、複数の文化で育っている子もいます。

日本語も含め、すべての子どもたちが身につけてきた言語・文化は、どれも同等に大切なものです。また、複数の言語・文化、そして、多様なものの見方や考え方に日常的に触れることができる環境は、とても魅力的だと言えます。

先生がこのような意識や姿勢をもち、その素晴らしさを学校全体で共有していきましょう。

事例⑪ 「スペイン語BOX」

ウチダ先生は日本に来たばかりのサントス君を学級に迎えるにあたり、サントス君の出身地域やサントス君が話すスペイン語について学級の子どもたちに関心をもってもらいたいと思いました。

そこで、教室に「スペイン語BOX」という箱を置き、子どもたちがサントス君に聞きたいことを紙に書き、いつでも箱の中に入れられるようにしました。ウチダ先生は子どもたちからの質問を、自動翻訳や支援助手の先生の助けを借りながらサントス君に伝えました。そして、朝の会などのちょっとした時間を使い、サントス君と一緒に、みんなからの質問に答えるようにしました。

子どもたちからは、サントス君やサントス君の出身地域のこと、スペイン語の表現など、毎日たくさんの質問が箱の中に届きました。日本語を学び始めたばかりのサントス君も、学級の友達に自分のことや出身地域のことが伝えられ、自分の母語を使ってみんなとコミュニケーションできることがとても嬉しいと言っていました。

事例⑫ 「ワンさんに教わる中国語」

シマダ先生の学級には日本語学習中のリーさんとワンさんがいます。リーさんは滞日年数もワンさんより長く、日本語での会話がよくできます。ワンさんは自分から日本語で話すことがまだ難しく、シマダ先生は、ワンさんが学級でいつも自信がなさそうな様子が気になっていました。

ワンさんにもっと自信をもっているいろいろなことに挑戦してほしい、学級の子どもたちにワンさんの頑張りを知ってほしいという願いから、シマダ先生は毎日の帰りの会で「ワンさんに教わる中国語」という活動をすることにしました。ワンさんに、母語の中国語の簡単な表現を学級の子どもたちに教えてもらい、普段は教わる側であることの多いワンさんに、教える側になってもらうことにしたのです。ワンさんが言ったことを、中国語も日本語もできるリーさんが通訳しました。

学級の子どもたちはワンさんとリーさんが自分たちの知らない中国語ができることに驚き、毎回、とても興味をもって楽しんでいました。

なるほど！私の学級でも、子どもに何か教えてもらおうかなあ！



事例⑬ クラスメイトと一緒にスペイン語会話

ジュン君は3か月前に来日した小学校3年生です。母語はスペイン語で、来日後に日本語を学び始めました。ジュン君の先生は学級で「スペイン語の簡単な会話を練習してジュン君と話してみよう」という授業をしました（下記教材参照）。ジュン君と、ジュン君の同級生でスペイン語が母語のマリアさんの2人が先生役になり、みんなのスペイン語の会話相手になってくれました。学級の子どもたちは「一緒に遊ぼう」「～が上手だね」などをスペイン語で一斉懸命練習しました。授業の感想には「初めてジュン君と話した!」「スペイン語って難しいな」「もっとスペイン語を話したい」という声があり、その後、ジュン君は友達との交流がどんどん増えていきました。

実は担任の先生が一番びっくりしたのは、マリアさんが書いた感想です。マリアさんは日本語もよくできますが「これまでみんなとスペイン語で話したいと思っていたけど、やっとその日が来た」と書いてくれました。

さそ
誘う

☺ **Let's play ~ (together).**
レッツ プレイ (トッギャザー)

☹ **Vamos a jugar ~ (juntos).**
バモス ア フガール (フントス)

☺ **Vamos jugar ~ (juntos).**
ヴァモス ジョガール (ジュントス)

☹ **~ (Cùng đi) chơi đi.**
(ゴング ディ) チョイ ディ

☹ **Mag laro ~ (tayo).**
マ グ ラロ (タヨ)



☺ (一緒に) 遊ぼう。
(issho ni) asobou.

☺ (サッカー) しよう。
(sakka) shiyou.

☹ **Mag laro ~ (tayo ng soccer).**
マ グ ラロ (タヨ ナン サッカー)



☺ **Let's play ~ (soccer).**
レッツ プレイ (サッカー)

☹ **Vamos a jugar ~ (fútbol).**
バモス ア フガール (フットボール)

☺ **Vamos jugar ~ (futebol).**
ヴァモス ジョガール (フッチボウ)

☹ **Choi ~ (bóng đá) đi.**
チョイ (ボン ダ) ディ

ほめる

☺ **¡Bien! Escribes bien.**
ビエン エスクリベス ビエン

☺ **Muito Bem.**
ムイト ベン
Que letra bonita.
ケ レトラ ボニダ

☺ **Giỏi quá! Chữ đẹp quá.**
ゾイ クワッ ツ デッブ クワッ

☺ **Ang galling!** アン ガリン!
Ang ganda naman nang sulat mo.
アン ガンダ ナマン ナン スラト モ

☺ **You are good at playing soccer!**
ユアー グッド アット プレイング サッカー

☺ **¡Juegas bien fútbol!**
フェガス ビエン フットボール

☺ **Você joga bem futebol!**
ボセ ジョガ ベン フッチボウ

☺ **Đa bóng giỏi quá!**
ダ ボン ゾイ クワッ

☺ **Ang Galing mo naman sa soccer.**
アン ガリン モ ナマン サ サッカー



☺ いいね!
i-ne!
字が上手だね!
ji ga jo-zu da ne!

☺ **Your writing is good!**
ユア ライティング イズ グッド

☺ サッカー上手だね!
sakka-jo-zu da ne!

古川敦子編 (2016) 『はなしてみよう：きになるあの子と なかよくなる』

注意が必要なのは、「母語」といっても定義が様々あることです。最初に覚えた言語、または一番得意な言語を指す場合があります。また、保護者同士の母語が違って子どもが複数の母語になる、移住経験によって最初に覚えた言語と現在一番得意な言語が異なるなど、どれが母語と言えるか定まらない場合もあります。

さらに、「**語ができるはず」「〇〇について知っているはず」と決めつけないことも大切です。複数の言語文化背景をもつ子どもの一番得意な言語やアイデンティティは成長の過程で揺れたり変化したりします。子どもの母語・母文化を使った活動を計画する際には、その子ども自身の気持ちや考えに配慮をしましょう。

もっと深めたい先生へ

母語の力が認知力・思考力の土台になる

人はことばを使って思考しています。そして、認知力や思考力を高めるためには、ことばの力がしっかりと育っていることが必要です。

子どもが、自分もっていることばの力を最大限に使って学び、認知力・思考力を高めたいけるように、母語の力を活かした学習支援の方法や、母語と日本語の両方の力を伸ばしていくための支援について考えてみましょう。

1. 子どもが母語で培った力を活かす

出身国・地域で学校に通った経験があり、母語の読み書きの力、認知力や思考力が年齢相応に発達している子どもは、その力が日本語力と学力を伸ばす基盤になります。母語で培った知識や概念を使って新しいことを学んでいけるからです。

例えば、単元や授業のポイントとなる概念やキーワードを抽出しておき、支援助手の先生とも協力して母語を活用した先行学習を行うと、在籍学級の授業での理解度が高まります。また、在籍学級でも、考えをまとめたり自分の意見を書いたりするときに、母語で書くことを勧めるのもよいでしょう。学習内容を子どもの日本語力に合わせてではなく、母語でならわかる・できる方法も取り入れ、認知力・思考力を高めていくことを意識しましょう。

事例⑭ 先行学習で母語も活用

右の写真は、日本語教室で小学校3年国語科「すがたをかえる大豆」の単元の先行学習をしたときの掲示物です。「大豆」という漢字を児童が自分で書いて大豆の実物を貼り付け、母語のポルトガル語で「SOJA」と書かれています。単元の教科書の文章に出てくる日本特有の食材や料理は写真で視覚的にわかるように示されています。「昔の人」、「栄養」、「食品」、「工夫」といったキーワードは母語を併記しています。大豆で豆まきをする「節分」の文化的な情報も加えられています。



自動翻訳を使えば、私にもできそうだなあ。

さらに極めたい先生へ

保護者や地域の関係者とともに母語・母文化を育む

子どもは、学校で毎日使う日本語の力は伸びても、主に家庭でしか使わない母語の力が伸びず、だんだんと母語を忘れていってしまうこともあります。一度失ってしまった母語を大人になってから学び直すのは簡単なことではありません。

子どもの母語・母文化を育んでいくには、家庭や地域の協力が不可欠です。保護者や地域の関係者と母語・母文化の重要性について認識を共有し、一人ひとりがつとことばや文化の「貴重な資本」を育てていくために、どのような働きかけができるか考えてみましょう。

1. 母語を忘れてしまわないように保護者に働きかける

保護者には、母語で毎日たくさん子どもと話してもらうように働きかけましょう。

保護者のなかには子どもの日本語力を伸ばそうと思って家庭でも日本語で子どもと話そうとする人もいます。しかし、ことばのやりとりを通して発達する社会性や情緒・認知面の力を高めるためには、保護者が一番得意な母語で子どもとコミュニケーションをとることが有効です。母語の力を高めることが、のちに日本語の力も伸ばすことになります。

子どもの日本語の力が伸びていっても、保護者や自分とつながりのある母語・母文化を保持し、継承することは非常に大切です。

実際に、日本で生活しながら母語も保持・伸長させ、日本語も十分に習得している子どもの保護者に伺ってみると、家庭では以下のような工夫を意識しているそうです。



家庭で母語の力を育む工夫の例

- 母語で書かれた絵本や本を子どもに見せて、保護者が母語で「読み聞かせ」をする
- 毎日、学校での出来事を尋ねて、子どもの気持ちや考えたことを母語で一緒に「話し合う」
- 学校で勉強したことを、母語で話したり書いたりする機会を作る
- 子どもがすぐに手に取れるところに母語の絵本や本を置いて、母語を読む機会を作る
- 出身国・地域の親戚や友達とEメールでやりとりするなど、母語で書く機会を作る
- 出身国・地域の学校の教科書を取り寄せて、子どもと一緒に母語を使って勉強する

家庭の方針や子ども本人の考え方は様々ですから、こうしたほうがよいと一方的に伝えるのではなく、子どもの成長と将来のためにどうすればよいかを一緒に考えるという姿勢が大切です。子どもが大切な母語を忘れないように、折に触れて保護者と話してみましょ

2. 子どもの母語・母文化を社会の中で価値づける

言語・文化を個人のものとしてだけではなく、集団や地域コミュニティの「資本」として捉える見方があります。外国につながる人々がもつ言語・文化も、その地域で暮らす人々全員にとっての貴重な財産です。

少数派の言語・文化も大事にし、多数派の言語・文化と同等に価値づける意識が共有されている地域コミュニティでは、外国につながりをもつ子どもたちも自分の母語・母文化に自信や誇りをもつことができます。そして、母語・母文化を保持し、継承することに意欲的に取り組むことができます。母語・母文化を育んでいくことは、アイデンティティの形成、ひいては、その子どもが豊かな人生のキャリアを築いていき、社会の一員としての役割を担うことにつながっていきます。

複数の言語・文化に触れる機会に恵まれ、様々な考え方や価値観をもつ人々と交流できる地域コミュニティは、豊かな財産をもっている地域だと言えます。

学校は、そうした地域コミュニティの多様な言語文化背景をもつ人々が集い、交流し、ネットワークを広げていく場として、大きな役割を果たすことができます。

事例⑯ 保護者も活躍した「ワールド集会」

ある小学校では、毎年「ワールド集会」を開催し、外国につながる子どもが自分の出身国・地域の文化や良いところなどをみんなに紹介しています。

児童には、ワールド集会でどのように伝えたらよいか、家庭で保護者への聞き取りもしてもらいます。ある年の児童たちは、保護者に出身国のブラジルのサンバや、ペルーのマリネラの踊り方を教わってきました。発表で使う音楽のCD作成や、衣装の帽子を用意するなど、たくさんの保護者の皆さんが協力してくださいました。また、フィリピンやベトナムなどの「お正月」について発表したときには、保護者の皆さんが発表のために特別に料理を作ってくださったり、料理やお正月飾りの写真を撮って持たせてくれたりしました。児童たちは日本のおせち料理やお正月飾りと比較しながら発表しました。

ワールド集会の当日も多くの保護者が参加してくださり、舞台の後ろで子どもたちの発表を見守ってくれる方もいらっしゃいました。

母語・母文化が大切だって何となく思っていたけど、その大切さをみんなが理解して、共有していくことが必要ですね。



たくさんの言語・文化に触れられる環境は、私たちや地域・社会にとっても「財産」なんですね。



伊勢崎市には、豊かな多言語・多文化の「財産」があって、みんながその「財産」を享受できる…。それってすごいことだと思います！





IV ことばの力を伸ばすために



ケイケン先生、先生の学級の子どもは日本語も上手だし、特別なサポートはしていないんですよね？



ええ。でも、友達とは問題なく話しているように見えるんですけど、やっぱり、授業で使う語彙や表現って難しいですね。



日常のおしゃべりができればいいわけじゃなくて、新しいことを学習したり、考えを深めたりするためのことばの力も伸ばしていきたいですね。

子どものことばの力は、どうやって伸ばしていけばよいのでしょうか？



一歩ふみ出す先生へ

子どものことばの力について

「ことばの力」についてどのようなイメージをもっていますか。ことばの力は、例えば、「単語をいくつ知っているか」「何年生の漢字が書けるか」「助詞を正確に使えるか」といったことで測れるのでしょうか。「日本語のテストで何点取れたら在籍学級での授業に参加できる」と、判断できるのでしょうか。

まず、子どものことばの力について、3つの特徴を理解しておきましょう。

1. ことばの力は常に変化している

子どものことばの力は、環境の変化などによっても大きく変わるものです。例えば、前の学期にはできていたことが、冬休みなどをはさんだらすっかり忘れてしまった、というようなことはよくあります。また、ひらがながなかなか覚えられなくて苦労していた子どもが、ある瞬間、文字と音と意味のつながりがわかったとたんに堰を切ったように吸収していったなど、何かのきっかけで急激に伸びていくこともよくあります。

ペーパーテストのような筆記テストでは、変化しつつある子どものことばの力の一端を測れるだけですから、テストの結果だけでその子どもの力を判断することは難しいです。子どものことばの力の全体像を把握しようとするには、その子どもが周りの子どもたちや先生とコミュニケーションをとっているときの様子や行動をよく観察すること、実際に子どもと対話しながら、実践の中で表れる子どものことばの力を捉えようとするのがとても大切です。

2. ことばの力は場面や状況によって違って見える

ことばの力は、コミュニケーションの場面や状況によって表れ方が異なります。例えば、在籍学級で大勢のクラスメイトの前ではなかなか発言しない子どもが、ペアやグループでの活動や日本語教室での少人数指導では積極的に発言することがあります。また、まだあまり話せないと思っていた子どもが、好きなアニメなど興味をもっていることについて話しているとき、いろいろな語彙や表現を豊かに使うこともあります。

もしかしたら、先生が普段見ている子どもの様子やことばの力は、別の場面や状況ではまったく違って見えるかもしれません。学校生活の様々な場面でのことばの力を捉えるためには、一人で判断するのではなく、複数の先生がそれぞれの視点を持ち寄り、異なる場面や状況での子どもの様子について情報を共有することが大切です。



音楽や家庭科の先生にも、子どもの様子についてもっと聞いてみようかな。

3. ことばの力は相手とのやりとりの中で引き出される

ことばの力は、その子ども自身が「知りたい」「伝えたい」と思うことを、伝えたい相手と直接ことばでやりとりする体験を通して育まれていきます。まだあまり親しくない人と話すときや緊張する場面では自分の気持ちを伝えるのが難しいという経験は誰にでもあられると思います。ことばは、相手との関係性の中で生まれてくるものです。大事なことは、その子どもが相手の話を聞きたい、自分の気持ちや考えを伝えたいと思えるような人間関係づくりです。

まず、先生が子どもの長所や努力を認め、その子どもが言いたいこと、言おうとしていることに耳を傾けましょう。そして、毎日、先生から話しかけましょう。そのような先生の姿を見て、学級の子どもたちも、その子どもが話そうとしていることをじっと待って聞いたり、わかりやすいことばで話しかけたりするようになります。先生や友達との人間関係ができてくると、その関係性の中でコミュニケーションを重ねることによって、ことばの力もだんだんと伸びていきます。

子どものことばの力にはこのような特徴がありますが、力の表れ方には個人差が大きいことにも注意が必要です。例えば、自分にとって新しいことばである日本語をなかなか話さない「沈黙期」と呼ばれる期間が長い子どももいます。しかし、この時期は、話さなくてもわかっていないのではなく、相手のことばや表情や行動を観察しながら、理解を深めてことばを蓄積している時期です。「まだ日本語がわからないからあまりたくさん話しかけないでこころ」とは思わずに、どんどん声かけをしていきましょう。

事例⑰ 先生との15分間対話

これはアメリカのシアトルの公立小学校に子どもを通わせていた日本人保護者の話です。その小学校には英語を母語としない子どもたちのための英語指導教室がありますが、簡単な会話ができる子どもは英語母語話者と一緒に教科学習をします。そして、毎朝、朝の会の時間か1時間目の授業の初めの15分間は、別室で英語指導担当教員と1対1で会話をするそうです。この保護者の子どもは日本語が母語ですが、現地の幼稚園に通っていたので英語が少しわかり、毎朝15分間この別室指導を受けました。15分間、先生は子どもに英語でたくさん問いかけ、子どもは自分が言いたいことを英語で何と云うのか教わります。親しい先生と1対1で毎日15分間話すこの時間が、子どものことばの力を伸ばすのにとても良かったそうです。

ことばの力の見取り方については『つながる・ひろがる ISES AKI ステップ』4～6頁「日本語ステップ」、日本語に初めて触れる子どもの指導方法については同12～13頁「はじめの8歩」の使い方も参照しましょう。

ことばの力の3つの特徴は、川上郁雄（2006）『「移動する子どもたち」と日本語教育：日本語を母語としない子どもへのことばの教育を考える』明石書店 を参照しました。

もっと深めたい先生へ

教科学習に必要なことばの力

日常会話では問題がないのに、教科学習でつまづくのはなぜだろうという声がよく聞かれます。まず、日常の会話力と教科学習に必要なことばの力は何が異なるのかを理解しましょう。そして、教科学習に必要なことばの力を伸ばすにはどうすればよいか考えてみましょう。

1. 日常の会話力と教科学習に必要なことばの力の違い

日常の会話力は、親しい相手とことばを介してコミュニケーションをとる経験の積み重ねによって身につけていきます。一方、教科学習で使われるような抽象的な内容を聞く・話す・読む・書く力は、読書や学校での勉強を通して伸びていく力です。日常の会話力は比較的早く習得できますが、第二言語での教科学習に必要なことばの力が年齢相応に伸びるまでには時間がかかります。

複数の言語・文化環境の中で学んでいる子どもは、日常会話では流ちょうに話していても、よく観察してみると、実は理解できる語彙が限られていたり、文章の読み取りや作文で苦労していたりすることがあります。「会話ができてから大丈夫」と考えず、教科学習への参加を通してことばの力をさらに伸ばしていくという意識をもつことが大切です。

複数の言語・文化環境で育つ子どもの場合、特別支援教育で対応すべきかどうかを判断するのは大変難しいです。時間をかけて様子を見る、保護者に家庭での様子を聞き取る、専門家の診断を仰ぐなど、慎重な対応が求められます。

2. 教科学習言語能力 (Academic Language Proficiency) とは何か

文部科学省(2014)『外国人児童生徒のためのJSL (Japanese as a Second Language) 対話型アセスメントDLA (Dialogic Language Assessment)』では、教科学習に必要なことばの力を「教科学習言語能力 (Academic Language Proficiency)」として説明しています。これは、カナダのトロント大学のCummins (カミンズ) 教授が提唱した概念です。

教科学習言語能力とは、教科の内容と用語の概念的知識の習得、教室で話される言語表現、学習をうまく進めるための学習ストラテジー (方略) など、言語の使用を通して発達する認知的な力を含む能力のことです。単に各教科の専門用語を指しているのではないことに注意が必要です。このことばの力は、第二言語で学ぶ子どもだけでなく母語で学ぶ子どもも教科学習に参加することによって身につけていきます。

日本語学習中の子どもの場合、日本語の基礎を学んでいくと同時にできるだけ早い段階から教科学習に取り組み、ことばの力とともに年齢相応の認知力と思考力を高めていくことが重要です。

3. 教科学習言語能力をどう伸ばすか

教科学習言語能力を伸ばしていくためには、その子どもの年齢に合った認知的活動をとまなう学習が必要です。日本語教室での個別指導においても、単に語彙や漢字や計算のドリルをするのではなく、教科の単元の目標につながるような学習内容を考えましょう。そして、子どもと対話しながら、子どもが自分の考えをことばで表現できるように支援していきましょう。



【教科学習言語能力を伸ばすために】

- その子どもの学年の学習課題に取り組めるように、イラスト・写真・図・記号など、ことば以外の視覚情報を工夫して課題を提示し、理解しやすくする。
- 単元の重要語句の概念を、ことばの意味にも注目させながら教える。
(例：算数で「四捨五入」の概念を教えるときに「捨」「入」の意味も確認するなど)
- 年齢相応の認知力を必要とする内容や抽象度の高い内容について思考できるように、タブレットや翻訳アプリ等を活用して母語でのインプットやアウトプットも併用する。
- 子どもが自分の考えを日本語でも表現できるように、その子どもが言いたいことを対話によって引き出して確認しながら、適切な表現を提示する。
- 語彙力を高めるために、読書を奨励し、読んだ本の内容や感想について話したり書いたりする活動を継続的に行う。



これは、外国につながりをもつ子どもたちだけではなく、日本語が母語の子どもたちにもいいかもしれませんね！

事例⑩ 「読む」「書く」で日本語力アップ！

ブラジルから日本に来たサユリさんは、小学校3年生の頃に日本語がある程度話せるようになりました。4年生のときには担任の先生のおかげで日本語力がさらにぐんと伸びました。先生は、学級の全員に対して、毎日「その日の出来事」を書いてくる宿題を出しました。サユリさんは「先生が添削してくださったので、自分が伝えたいことを日本語で表現する力がついたと思います。」と言っています。サユリさんは読書が好きで、読書体験を通して日本語の力がついたと感じています。「青い鳥文庫（講談社）」のシリーズを読み始めた頃から、日本語を聞く力と話す力も一気に伸びたそうです。サユリさんは、母語のポルトガル語の本も読んでいます。高校生になった今、地域の日本語教室でボランティア活動もしています。

考えを話したり書いたり、自分のことばで表現する機会をもっと増やしてみようかなあ。



さらに極めたい先生へ

複言語・複文化をもつ子どもの世界

複数の言語・文化環境で育ってきた子どもは、日本語・日本文化だけではなく、複数の言語・文化を自分の「資本」としてもっています。日本語が早くできるように、日本の文化に早く慣れるようにとの視点だけで見ていると、一人ひとりがもっている「貴重な資本」をつい忘れてしまいがちです。「はじめに」で述べたように、複数の言語・文化をもっていることで、子ども自身の世界が広がります。その「強み」を活かすことばの教育のあり方について考えてみましょう。

1. 複言語・複文化をもつ子どもの力

「多言語・多文化」とは、社会の中に複数のことばや文化が共存している状態を指します。これに対して、「複言語・複文化」という考え方は、個人の中に複数のことばや文化があることに着目したもので、多くの言語・文化が共存するヨーロッパの言語政策の基本理念となっています。

複言語・複文化の考え方では、その子どもが蓄積してきたあらゆることばと文化の能力を包括的、総体的な力として捉えます。複言語・複文化をもつ人の知識や技能は、個人の中で、これは**語の力、これは〇〇語の力、これは△△の文化、と独立して存在するのではなく、相互に作用し合いながら複合的な力として発揮され、変化し続けていくものだからです。

個人の中にある複言語・複文化の力は、例えば、〇〇語でよく話せるけれど、書くことは難しいなど、アンバランスに見えることもあります。しかし、そのようなアンバランスな状態を否定的に捉えるのではなく、「一つひとつの能力を『わたし語・わたし文化』をつくり上げる大切な要素（奥村2019, p.179）」として肯定的に捉えることがとても大切です。どんなに些細なことでも、一つひとつの部分的な力の集合体が複言語・複文化をもつ子どもの力になっていきます。

子どもがもっている力は、語彙や文字や文法などの言語知識ではありません。例えば、相手や状況に合わせて適切な挨拶ができる、わかりやすい構成で文章を組み立てられる、感情豊かにスピーチができるなど、様々なスキルや能力が含まれます。子どもがもつスキルや能力、蓄積してきた経験や知識は、新しい言語を使うときにも活用されています。

南浦（2023）は、『『どれか一つの言語で完璧に世界に参加する』というのではなく、『もてる言語の全てをフルに駆使しながら、人とコミュニケーションをしたり、考えたり、物事に参加していく』ということを積極的に認めていくことは、外国につながる子どもたちだけでなく、（中略）全ての子どもたちにとっての多様な言語と文化を認めていくことにもつながります。』と述べています。



ということは、私も、日本語、英語、
大学で勉強したドイツ語…

群馬の方言も！地域のことばや文化も含めて、
誰もが多様な言語・文化をもっていますよね。



2. 複言語・複文化の力を肯定的に評価する

子ども一人ひとりが蓄積してきた複数のことばと文化の力を包括的に捉えるためには、評価の視点も工夫する必要があります。日本語母語話者を基準に日本語が上手に使えるようになることを目標とするのではなく、子どもが自分の複言語・複文化の資源を総動員してコミュニケーションをとる行為を丸ごと受け止めて、その子どもの力と努力を認めていくことが大切です。

評価ツールの一つである文部科学省（2014）『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA』について、櫻井（2019）は次のように述べています。

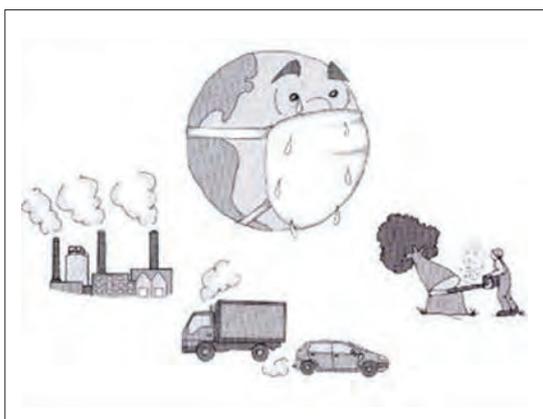
DLAのDはDialogic（対話型）、LはLanguage（言語）、AはAssessment（評価）で、それらの頭文字を取ってDLA（ディー・エル・エー）と呼んでいます。この名称の通り、紙筆のテストでは測れない**文化言語の多様な子ども**（Culturally and Linguistically Diverse Children, 以下、CLD児）の言語能力を一对一の対話を通して測る**支援付きの評価法**です。（中略）日本語能力を測定するために開発されたものですが、CLD児の全人的な育成のためには、子どもたちの持つ複数言語の力を支援する必要があるとの思いから、同じ手順を進めれば日本語以外の言語の力も評価できるような構造になっています。また日本語を継承語とする子どもたちの評価にも活用可能です。

DLAの目的は、子どもの持っている言語の知識を点数化、序列化して示すことではなく、その言語を使って「何ができるか」を発達段階と**教科学習**との関連の中で包括的に捉えることです。そしてDLAの実施過程を通して「一人でできること」だけではなく、「支援を得てできること」を観察することにより、これからどのような学習支援が有益であるかを多角的に検討するための情報を得ることを目的としています。子どもがどのように学んでいるのか、その学びがどのような支援があれば促進されるのか、どうすれば学習意欲を喚起できるのか等を捉え、指導・支援に役立てることを目指しています。（中略）一对一のやり取りを注意深く観察することによって、学習につながる多くのヒントが得られます。

（櫻井2019, pp.239-240, 太字は原文ママ）

DLAは、〈はじめの一步〉、〈話す〉、〈読む〉、〈書く〉、〈聴く〉のタスクから構成されており、実践ガイドに従って対話を進めます。例として、〈話す〉の認知タスクの一つを見てみましょう。〈話す〉は、基礎タスク、対話タスク、認知タスクの三つから成ります。認知タスクでは、子どもが絵カードを見ながらまとまりのある話や説明ができるかどうかを見ます。

DLA〈話す〉認知タスクの「環境問題」カード（小学校 中学年以上対象）の例^注



- ①「地球が泣いています。どうして泣いていると思いますか。」と聞き、環境問題の因果関係を説明できるか、どのような単語や表現を使って答えているかを観察する。
- ②「どうすればいいと思いますか。」と聞き、自分で考えて意見を伝えることができるか、どのような単語や表現を使って答えているかを観察する。
※言語表現だけでなく、態度、課題に対する興味、意欲などを観察し、様々な観点から今後の支援について検討する。

注)「環境問題」の絵カードは、文部科学省(2014)のDLA評価キット巻末資料p.161より抜粋。
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/05/24/1405244_4.pdf

子どもと対話する際に大事なことは、子どもが言おうとしていることをゆっくり待って聞き、途中で子どもの発話をさえぎったり、否定したり、訂正したりしないことです。説明が難しそうな場合は、子どもの発話を繰り返したり、問いかけたりして支援し、子ども自身の発話を引き出すようにします。

例示したようなタスクを実施してみると、地球が泣いている理由を理解している子どもは、それを表現する日本語力がまだ十分でなくても、知っている単語や相手にもわかる言語（例えば英語など）を使ったり身振り手振りを交えたりして、なんとかして伝えようとする姿が見られます。子どもとことばのやりとりをしながら、その子どもがどのように複言語・複文化の力を使っているのか、どのようなことを考え、どのようなことに興味をもっているのかなどが見えてきます。支援助手の先生に協力してもらって、母語でやりとりするときの力を見てもみることができます。

子どもは、このような1対1の対話によって支援を得ながら自分の考えを表現していくことでことばの力を伸ばしていきます。普段の教育活動においても対話を通して子どもの考えを引き出し、子どもが複言語・複文化の力を活かして自信をもってさらにチャレンジを続けていけるようにすることが重要です。

3. 一人ひとりの幸せのためのことばの教育を考える

複言語・複文化の力は、就学前から発達し始め、学校での学習を通してだけでなく、「その人・その子を取り巻くあらゆる環境、経験、人や情報との出会いを通して生涯発達し続ける（奥村2019, p.183）」ものです。

大事なことは、その子どもの生涯にわたる学びの過程を意識して、子ども自身が自分の目標を設定し、他の人に助けってもらったり仲間と学び合ったりしながら、自分で進路を切り拓いていけるようにすることです。

奥村が述べるように、「ことばの学びについても、何を・どのように・どのぐらい学ぶかということ、他の誰かではなく、『わたし』が自分で決定（奥村2019, p.183）」することが必要です。子ども自身が、自分の幸せのためにどのように複言語・複文化の力を伸ばしていくかを決めていけるように、複言語・複文化環境で育つ子どもの思いや願いに耳を傾け、励ましながら伴走していく姿勢が求められます。

子どもが自分の興味・関心や、将来の夢・希望に向かって取り組んでいけるようにするためのきっかけづくり、仲間たちとの協働的な学習の場の設定、リソースの活用【→p.11 子どもがもっているリソースを活用した「学びの広がり」を考える 参照】は先生方がすでに日々の教育活動ですべての子どもたちに対して実践していることの延長線上にあります。

複言語・複文化の資本をもっている子どもは、様々なものの見方、考え方を身につけています。そして、将来につながる様々な人間関係や社会とのつながりをもっています。

伊勢崎市の子どもたちは、日本語、自分とつながりのある言語、英語など複数の言語や文化の資本を身につけられる可能性をたくさんもっています。そのような子どもたちが幸せに学べる学校・社会は、すべての子どもたちと先生方にとって幸せな学校・社会になるでしょう。



奥村三菜子（2019）「欧州における継承日本語教育と欧州言語共通参照枠（CEFR）」近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美（編）『親と子をつなぐ継承語教育：日本・外国にルーツを持つ子ども』くろしお出版 pp.175-189

櫻井千穂（2019）「対話型言語能力アセスメント『DLA』の有用性」近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美（編）『親と子をつなぐ継承語教育：日本・外国にルーツを持つ子ども』くろしお出版pp.238-252

南浦涼介（2023）「日本語だけでなく、子どもたちの複数の言語をすべて祝福する」連載「みんなで力をつくる学校：外国につながる子どもも、みんなも、伸びていくことを目指して」第6回 教育出版ホームページ <https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/line/library/topics/2023/cooperation/0907.html>

文部科学省（2014）『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA』 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm



4つの島、全部行ってきましたー！

私も！新しい情報もあったし、「これまでやってきたことが使えるんだ」って思ったこともたくさんありました。



私は担任の先生たちともっとつながって
いこうって、元気が出てきた感じ。

来月の編入生と、学級の子どもたちと、
どんなことをしようかなって、今から
ワクワクしてます。



私も学級にいる外国につながりをもつ子どものことを
観察して、いろいろな活動を工夫してみます。
何か気づいたことがあったら、お話ししますね。

私の学級で試してみたこともお話しします。
うまくいったことも、うまくいかなかった
ことも聞いてください！



頑張っている子どもの成長をどうやって応援していくか、
みんなでアイデアを出し合っていきましょう！



つなげよう！ひろげよう！
多言語・多文化 いせさきの学び

令和6（2024）年3月発行

監修 伊勢崎市教育委員会
編集 古川敦子（津田塾大学）・小池亜子（国士舘大学）
協力 嶋崎雅子・伊藤里恵子・内門香代子・佐藤康・田口健治
（令和5年度伊勢崎市教育研究所 課題別自主研究 日本語教育研究班 研究員）
発行 伊勢崎市教育委員会
〒372-8501 群馬県伊勢崎市今泉町二丁目410番地
印刷 上武印刷株式会社
〒370-0015 群馬県高崎市島野町890番地25

本冊子はJSPS科研費19K02404（研究代表者：小池亜子）、21K02446（研究代表者：古川敦子）の助成を受けて作成されました。